
CIEC Newsletter

お知らせ

<2006PC カンファレンス>

2006PC カンファレンスは京都です！

開催日時：2006年8月3日（木）～5日（土）

開催場所：立命館大学衣笠キャンパス

※2006PCC 分科会レポート募集要項はE-mailでご案内をいたします
(郵送でののご案内はいたしません)

<CIEC 会誌論文募集>

『コンピュータ&エデュケーション』Vol. 20 (2006年6月1日発行予定)

投稿は随時受け付けます

締め切り 2006年2月20日

詳しくは会誌 Vol. 19 (P. 122～) をご参照下さい

CONTENTS

<CIEC 研究会報告>

- ・CIEC 第55回研究会報告 2
- ・CIEC 第56回研究会報告 3

<おきなわ、北海道 PCC 報告>

- ・PC カンファレンス 2005in おきなわ報告 4
- ・PC カンファレンス北海道 2005 報告 5

<第1回運営委員会報告>

6

CIEC 会員状況

<個人会員 840名>

教員 616、大学職員 16、院生 48、
学生 5、生協職員 88、企業 26、
研究員 9、その他 32

<団体会員 94団体>

企業 31、生協 58、大学 2、
高校 1、法人 2

CIEC ニューズレター

2005年12月25日

発行：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

編集：CIEC 運営委員会

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196

e-mail jim@ciec.or.jp URL <http://www/ciec.or.jp/>

CIEC 研究会報告

<CIEC第55回研究会報告>

テーマ iPod の語学教育への活用・実践そして可能性
 日時 2005年10月16日(日) 13:30 ~ 17:00
 会場 大学生協杉並会館 2階会議室 (201、202、203)
<http://www.ciec.or.jp/office/info/ciecmmap.html>
 司会 鳥居隆司 (相山女学園大学)
 参加 45名

今回の研究会は、前回6月に、本学会の団体会員と個人会員との研究における連携を深めることを目的として企画された第53回研究会：テーマ「iPod の語学教育への活用・実践そして可能性」が、大変好評だったことを受けての、第2弾として位置づけることができます。

デジタルミュージックプレーヤー市場に旋風を巻き起こした iPod は、ハンディサイズで、ポケットにも簡単に滑り込んで、聞きたいときはいつでもどこでも片手で操作できます。この iPod を音楽だけで終わらせず、英語学習に価値を見出してみてもどうだろう、という観点からこの研究会のテーマが決まりました。英語を学ぶ上で一番必要なことは、学習を「継続」させることです。しかし、英語を使わなくても事足りる日常生活において、毎日続けることは決して容易ではありません。そこで、携帯電話と同じくらい愛用している iPod に英語教材を入れておけば、ちょっとした空き時間に、気が向いたときに英語の世界に飛び込めます。

最初に、アップルコンピュータ株式会社の秋間氏 (チャンネルセールスアカウントマネージャー) より、最新の iPod nano についてご紹介いただきました、続いてエデュケーション部の平野氏より、各教育機関での語学学習への iPod 活用事例などについてお話していただきました。具体的には、デジタルミュージックプレーヤー (DMP) における iPod の教育ツールとしての優位性を、「直感的な操作性」、「記憶容量」、「画面表示領域の大きさとテキスト機能」、「豊富な周辺機器」の観点から説明されました。

「直感的な操作性」: スクロールホイールとボタンを統合した iPod は簡単に親指一つで楽々と操作ができ、右利き、左利き関係なく、ボタンの配置もシンプルなので慣れてしまえば筆記具は持ったままで操作することが可能。教材音声データは秒単位で巻き戻すことができ、気になるポイントはすぐに何度でも聞き直すことも可能。

「記憶容量」: 例えば東京リーガルマインド様における司法書士のような1年半にも及ぶ講座では、カセットテープの本数は約350本にも及ぶが、それだけの音声データを iPod はたった1台に収めることができる。系統立てられたライブラリを参照することにより聴きたい講座にすぐに辿りつくことが可能。設備コストもほとんど掛らず、データのインストール作業も容易。iPod へのデータインストール作業は iTunes とクライアント端末があればシンプルなインターフェースにより簡単な操作で行える。

「画面表示領域の大きさとテキスト機能」 「豊富な周辺機器」: テキスト表示のリンク機能を活用することにより、テキストデータからテキストデータへ、またテキストから音声データへとリンクを張ることが可能になる。iPod を選ぶ大きな理由の一つには、他社の製品に比べ iPod 用の周辺機器の数が群を抜いていることがあげられる。

以上のようなハードウェア面でのメリットのほか、最近話題

となっている Podcasting についても解説されました。Podcast とはウェブ経由で配信されるメディアで、フィード (URL) を「購読」することで自動的にコンテンツを受信できる機能で、それはハードディスク内蔵の DVD レコーダーでテレビ番組を予約録画して楽しむことに似ているということです。iTunes に統合された podcasting のコーナーには英語系の語学コンテンツも充実しており、iPod や iTunes を利用しているユーザーに、これまでにない方法で新しいコンテンツを探し、学内及び学外で学ぶことの方法を提供すると、事例をあげて解説されました。そして、iPod は、「音声データを活用して学ぶ」という行為を、従来のような時間と場所に縛られない、より身近なものに変える魅力を持ったツールであることを、平野氏は強調されました。



次に、資格の総合スクール東京リーガルマインドでは、iPod の圧倒的な記憶容量を利用して膨大な講義を収録し、iPod クラスを開講されていますが、今回は iPod を利用した新しい資格学習講座の「TOEIC 基礎力養成講座 iPod クラス」などに関する話題を、斉藤氏 (WEB 事業部制作課長) が提供してくださいました。東京リーガルマインド (通称: LEC) の会社紹介のあと、LECの音声教材がこれまでカセットを主メディアとしていたものを、容量と汎用性の面から、MD、CD等の他のメディアと比較しながら iPod へ到達したいきさつを、「LEC with iPod の流れ」として紹介され、TOEIC 基礎力養成講座の教材例 (リスニングとシャドーイング) を、デモンストレーションを交えて説明されました。受講者からは、「カセットに比べて音質もきれいで聞きやすい。」 「電車内で本を広げたり、学校内で資格の勉強をするのが正直恥ずかしいけれど、iPod なら勉強していないフリができてよい。ライバルに差をつけたという感じになります。」という好意的なコメントもある一方で、「iPod を持っているので、音声だけダウンロードできる様にして欲しい。」という経済性・効率性を求める声もあり、今後の開発への示唆が得られたと言及されました。



最後に、CIEC の外国語教育研究会では、「VOA (Voice of America) プロジェクト」として、VOA 素材から外国語 e ラーニング教材の開発を行ってきました。今回は、上村氏 (北九州市立大学) より、VOA 素材から外国語学習教材を iPod

を利用した教育に使用できる英語教材の作成に関する具体的な方法についてわかりやすくお話いただきました。以下は上村氏が記述された報告書です。

「iPod への語学教材取り込み・VOA 素材の活用について」
北九州市立大学国際環境工学部 教授 上村 隆一

まず、語学学習機器として見た iPod が、いかに従来の CALL および e-Learning システムで採用されてきたハードウェア、ソフトウェアと異質なものであるかを述べた。端的に言えば、PC に依存するかぎり不可能であった「いつでも、どこでも学習できる環境」が iPod によって簡単に構築できてしまうということである。もちろん、将来的なメディアの多様化、ファイル数の急激な増大を考慮すれば、本体内蔵の検索機能が全く不十分で、画像・音声とテキストの相互リンク・同期が取れないなど重要な技術的欠点はあるが、操作性および携帯性の良さは何物にも代え難い。その上、iTunes + Podcasting という強力なコンテンツ管理と自動更新ツールが教材作成・登録作業を簡素化してくれるので、教師が授業用の教材を短時間で準備し、随時 RSS 対応のサーバに追加していくことで、学習者側に教材データベースから自動配信することも可能になる。

次に、語学学習用の教材を iPod に取り込む具体的な手続きについて説明した。今回は、特に外国語教育研究部会で取り組んできた VOA 番組素材の共同利用について紹介し、同素材を iPod 対応として教材に活用するという前提で、入力・編集/加工・変換・転送の各手続きを実演操作によって示した。

最後に、今後の課題として、iPod が真に語学教育に特化した学習機器として活用されるためには、以下の点が重要であることを強調して、講演をしめくくった。すなわち、(1) 音声・テキストの同期と相互リンク機能の付加 (2) アカデミック価格設定などの教育機関向け特別サービス (3) HyperCard で経験したような、ボトムアップ型教材開発を促進するソース公開とツールの充実、の3点である。



なお、当日参加者から寄せられたアンケートでは、「i-Pod と音声コンテンツの現状がよく理解できた。」「i-Pod の具体的な教材制作方法に関する情報は有益であった。」「音声をダウンロードさせた i-Pod を生徒にどのように利用させたらよいのか今後の実践研究例を聞かせてほしい。」という、iPod への期待と具体的な可能性を求めるものが多くありました。第一弾に続く、2 回目の参加者も多く、当日参加者も複数おられたことから、教育面での iPod 利用への関心の高さが際立つ研究会となりました。

(文責：吉田 晴世)

< CIEC 第56回研究会報告 >

テーマ

「大学の情報教育における『2006 年問題』について考える」

日時 2005 年 11 月 19 日 (土) 16:00~19:00

会場 大学生協杉並会館 5F ダイニングルーム

報告者 辰己 丈夫

(東京農工大学 総合情報メディアセンター)

平野 伸彦

(横浜国立大学生協専務理事/大学生協東京事業連合
教材・学習用 PC プロジェクト委員長)

参加 41 名

大学教員・職員,小中高教員 14 名

大学生・大学院生 3 名

生協職員 24 名

開催趣旨

「2006 年問題」まであと 1 年となりました。2003 年度の学習指導要領改訂により、高等学校において新たに普通教科「情報」が新設され、必修科目となったことはご承知の通りです。2006 年は、教科「情報」を 3 年間学んだ新入生が初めて大学に入学してくる年となります。これに伴い、大学における情報教育がこれまで以上に大きく変化することが予想されます。これがいわゆる「2006 年問題」です。

CIEC 生協職員部会ではこの数年にわたり、大学におけるパソコン必携化の状況と大学生協のパソコン提案活動について研究会を開催してきました。2005PC カンファレンス開催地企画「PC 必携化時代の教育/教育環境を考える」では、以下の様な感想文が寄せられています。

「来年から情報科目を履修した新入生が本格的に入学してきます。その点と PC 必携化を考えたときに、これから大学生協は何をするべきなのか？」(生協職員)

これまでの到達点を踏まえて、第 59 回研究会では、「大学の情報教育における『2006 年問題』について考える」をテーマに、実際の高校における教科「情報」の現状について学ぶとともに、教科「情報」を学んだ新入生が入学するにあたって、大学の情報教育がどのように変化していくかを展望します。またそういった大学の情報教育や新入生のスキルの変化に際して、大学生協としてどのようなパソコンの提案、サポートを行っていくことが必要かについて考えます。(以上開催案内文より抜粋)

報告

まず、東京農工大学の辰己先生より、教科「情報」の現状についてご報告をいただきました。先生は情報処理学会内の情報処理教育委員会で、シンポジウム「高校教科『情報』の現状と将来」の企画運営に参加されており、またご自身が現役の高校教諭とのネットワークの中から日常的に情報収集しかつ意見交換をしていられっやいます。こうした研究と体験から、多面的に『2006 年問題』を捉えたご報告を頂戴しています。

そのなかで、現在の小中高で行われている新課程の学生が入学することにより、2008 年、2014 年などにより大きな節目が来ること、また現状のネットワーク環境との内容の不整合、教科「情報」と他教科の組み合わせ方法についての齟齬についての状況、教科「情報」で使用されている教科書をめぐる実態と問題点について触れられています。また、単純なプログラミングのテクニックではない「手順的な自動処理」の体験について情報処理学会の提言をより深めていただきました。



次に平野専務より、大学生協のパソコン提案活動の到達点とコンセプトについてご報告を頂きました。平野専務は、昨年から大学生協東京地区の教材・学習用 PC プロジェクトの委員長として、機種選定や講習会・サポートのあり方など、大学生協が新入生に PC を提供するにあたっての議論全般の座長をされております。大学生協が取り組んできたパソコンの歴史から始まり、現在のコンセプト、そして 2006 年への進み方について実例を交えながらご報告を頂きました。



質疑では以下の様な質問・意見が出されました。国連の 100 ドルパソコンの様な、安価なパソコンが利用できるかどうかの可能性について、考え方としては可能性があるが全国で統一した物を大学生協で提案できるかどうかは難しいと思われる、などの意見交換がされました。学生の参加者からは、新入生だけではなく過去にパソコンを購入した学生へのフォロー（例えばハードウェアアップグレードのできる機種開発はできないか、周辺機器の低価格提案はできないか、など）を含め、もっと学生が身近にパソコンを使える状況を作りたいとの意見がありました。生協職員からは、入学する学生のスキル差は一層大きくなる環境の中で、講習会等の内容について更に吟味する必要性があること、また「情報」で学んだとはいえ管理者から与えられた環境を利用してきた学生に自分のパソコンをどう「管理」するのか学んでもらうことについての必要性が出されました。大学の教員からは、学生がパソコンを利用することに際しての考え方がはっきり見えておらず、そもそもどういう学生を社会に送り出したいのかがはっきりしていないことが問題との意見が出されました。参加者のアンケートからは、現状を知ることができて良かった、今後 より深く調べていく必要があるといった意見が多く見られました。

まとめにかえて

この間、折に触れていわゆる『2006 年問題』について考える場をつくってきました。しかしながら、情勢認識としてはわかるけれども実際にどのようなことが起こり、大学教育がどのように変容し、また大学生協はそのなかでどのような役割を果たせるのか、具体的なイメージがわからない、あるいはそれぞれの立場で対応をするけれども全体像が見えてこない、

というのが正直なところではなかったでしょうか。企画全体を通じて、『2006 年問題』の捉え方、今後のテーマを鮮明にすることができたように感じています。以下、辰己先生からのご提言を中心にいくつかのポイントを述べてまとめにかえます。

1. 『2006 年問題』を初等中等教育において情報・コンピュータに接してきた子どもたちの体験の差によって起こる問題であると捉えた場合、
 - ・すでに中学で、選択ではあるが「情報基礎」を学んだ学生が入学している
 - ・2006 年からは中学で選択「情報基礎」、必修で教科「情報」を学んだ学生が入学
 - ・2008 年には中学で「情報基礎」、高校で教科「情報」をとともに必修で学んだ学生が入学
 - ・2014 年にはさらにすべての学生が小学校「総合学習」でも情報・コンピュータに接してくるということで、今後大きな段階的変化が続けて起こってくるという問題認識が重要。さらに今後指導要領の変更や「情報」入試化などの情勢による変化は必定。
2. 大学における教育がどう変化するか、また大学生協における講習会やサポートをどうつくっていくかを考えるとき、入学時あるいは入学時以前のリプレースメントテストの導入などによって入学者のスキル・スキル差を把握し即応することが重要になる。
3. そもそも「情報教育」と「教科教育の情報化」また小学校における「総合的な学習の時間」はそれぞれが全く異なる目的を持つものだという認識をあらためて持つべき。

本研究会は、今後入学してくる学生の状況、特にこれから学生に対して必要と思われることが交流され、今後学生に対して必要なことの方があらわれた研究会であったと思います。今後、より深く状況を交流し、学生にとって本当に求められるモノ・コトの提供を実現していく活動へ踏み出していくことが重要と考えられます。

以上

おきなわ・北海道 PC カンファレンス報告

<2005 PC カンファレンス in おきなわ報告>

テーマ 『ちゅら島おきなわで国際化と情報化』
 日時 2005年11月5日(土)～6日(日)
 会場 琉球大学 千原キャンパス
 参加 100名

去る 11 月 5-6 日に開催された「2005 PC カンファレンス in おきなわ」に参加させて頂いた。九州・沖縄版の PC カンファレンスの歴史は全国版よりも古く、1993 年に始まり、今回で第 13 回となる。遠隔地での開催にも拘らず 100 名の参加を得て、内容的にも全国版に劣らぬ充実ぶりであった。

1 日目の全体会では開会挨拶に続いて、落語家の桂かい枝氏による基調講演「笑いは世界の共通語」が披露された。「これ日本語で言うたらこんなですよ」と、中学時代の英語の授業での経験をもとに奇妙な日本の英語教育が浮き彫りにされた。また氏が精力的に行っている英語落語も披露され、海外

Council for Improvement of Education through Computers

公演での意外な経験などが紹介された。落語は座ったまま扇子と手拭だけを小道具に複数の登場人物の様々な動作を表現しなければいけない。日本人には暗黙の了解であるような見立てが海外では通用しない。軽快な口調に乗せて面白おかしく進む話の中で、コミュニケーションの本質について改めて考えさせられる内容であった。



続くパネルディスカッションは「ちゅら島おきなわで国際化と情報化—教育現場での可能性—」と題して、いずれも沖縄を拠点に活躍する7名のパネラーによる報告と意見交換が行われた。沖縄県立総合教育センターIT教育課課長の新正裕氏、琉球大学非常勤講師でフリーライターの佐々木千賀子氏、沖縄県立芸術大学教授の仲本賢氏、那覇国際高校教諭の上里博美・安里美香両氏、親子ネット事務局の板敷敷朝計氏が実践報告を行った。続いて琉球大学教育学部附属教育実践総合センター教授の米盛徳市氏をコーディネータに、これからの情報教育の可能性についての議論が盛り上がった。いずれの事例も高度な情報技術を駆使しながらも、あくまで教育や社会的実践本来の目標を追求したものである点はPCカンファレンスならではの良さであると改めて実感した。

協賛企業による展示「ITフェア」には15社が出展し、教育現場での利用提案を行い、その隣では生協学生委員企画「健康フェスタ」が催された。続くレセプションまでの間に十分な時間があつたため、例年の全国版PCカンファレンスではなかなか顔の出せない筆者も、それぞれのブースで導入事例や担当者の想いなどどう事ができたほか、健康フェスタでのヤニ検定とウッチン茶の試飲まで参加できた（これは翌朝役立った）。

レセプションでは、琉球大学の琉球芸能研究クラブによる演舞が披露された。メンバーは沖縄外の出身者も多く、大半が入学後に志したとのことだが、見事であった。会の締めくくりには、大学・組織または地域ごと、参加した全メンバーの紹介があった。些細なことのように、常連チームも初参加グループも「来年はまた〇〇で」という思いにさせる、重要な仕掛けであると思った。

2日目の分科会発表は3会場に分かれて行われた。第3分科会ではユーザーサポートをテーマとする4件の発表が続いた。1件目は北九州市立大学U.S.B.の皆さんによるPCサポート活動を通して自身の成長と今後の改善策について、2件目は筆者によるCIEC小中高部会の取り組みの紹介で、教員の授業運営をサポートする様々な人々からなるネットワークの話。3件目は九州工業大学のWindows講習会におけるグループ学習の効果について、4件目は琉球大学生協「Ryu-P」による「おきなわおもしろ紹介」であった。筆者以外はいずれも学生の発表で、それぞれに工夫を凝らしたものであった。互いのテーマが近いこと、また司会で琉球大学農学部教授の黒田登美雄氏が共通論点を抽出して下さったことで、かなり具体的な内容での質疑も交わされた。また、4件目の内容は

PC講習会でのプレゼンテーション資料作成の成果を披露するというものであったが、筆者個人的には閉会后、帰りのフライトまでの間で早速役立つ内容であった。



全体に、参加者間の距離感が近いこと、また学生が活発なことが印象的であった。回を重ね充実した内容を見せる九州・沖縄のPCカンファレンスには、一見些細な部分に、その盛り上がりを支える工夫が伺えた。一方、当然知っているだろうと思っていたCIECの知名度がほとんどなかったことにも驚かされた。ちょうど筆者の周囲では関西地方のCIEC会員を中心とした地域性のある活動が組織化されつつあり、おおいに参考になった。今後は全国各地で地域カンファレンスが活性化し、それらに下支えされる形で全国版のPCカンファレンスも一層の盛り上がりを見せることを期待する。

山田 祐仁 (辻調理師専門学校)

<PCカンファレンス北海道2005報告>

テーマ 『情報技術による地域連携を考える』
日時 2005年11月5日(土)～6日(日)
会場 北見工業大学 B211 講義室
参加 78名

2001年を皮切りに今年で5回目となった「PCカンファレンス北海道2005」、今回は北見工業大学を会場に、11月5、6日の2日間の日程で開催されました。

このカンファレンスは、CIEC(コンピュータ利用教育協議会)と大学生協が呼びかけ、毎年、北海道内の大学を持ち回りで開催している学術交流会で、情報技術の利活用に関心を持っている小中高大の教職員、生協職員はもちろんのこと、企業や行政といった、日ごろは交流の少ない異なるバックグラウンドの参加者を横断的に集めるユニークなイベントとなっています。



今回のカンファレンスは「情報技術による地域連携を考える」がテーマ。カンファレンス前日のテレビ宣伝も手伝い、2 日間にわたり総勢 80 名近くもの参加者が会場を訪れました。

第 1 日目の全体会では、記念講演とスペシャルセッションが行われました。記念講演は、千葉県立東葛飾高校の大橋真也先生から、「情報技術に基づく学校間の地域連携」と題した講演をいただきました。情報技術を活用し地域連携を推し進めてきた千葉県柏市の先進的な事例は、参加者にとって非常に大きな刺激となったようです。

また、スペシャルセッションでは、北見市ならびに網走管内の小中高大の教職員から、「情報技術に基づく地域における技術支援・情報教育の取組」をテーマに 5 件の講演がなされ、情報技術の利活用、地域の活性化、小中高大の連携等にまつわる課題の提起とともに、今後の活動の指針について活発な意見交換がなされました。

第 1 日目の夕刻に開催されたイブニングトークでは、「インターネットと子供たち」、「くらしと情報技術」、「大学生によるパソコン教室」、「インターネット最新技術」という 4 つのテーマの下、それぞれのブースに分かれ討論が行われました。座談会形式のリラックスした雰囲気の中、北海道内外からの参加者同士、おおいに親睦を図ることができたようです。なお、イブニングトークは非常に好評で、「もっと討論の時間が欲しい」、とのうれしい意見も寄せられました。

第 2 日目は、2 会場で分科会が行われ、合計 14 件の研究発表がなされました。内容は多岐にわたっていましたが、いずれも情報技術の利活用についての様々な取り組みが具体的に紹介され、熱心な討論が行われました。



また、新しい教育用ソフトや機材を紹介する IT フェアも 2 日間にわたり開催され、研究発表の合間に多数の見学者が訪れ、意見交換、交流でにぎわっていました。

青木 直史 (北海道大学)

日時：2005 年 12 月 11 日 (日) 10:00～13:30
 場所：大学生協会館 (杉並) 5F ダイニング
 出席：赤間道夫 (愛媛大)、綾皓二郎 (石巻専修大)、
 生田茂 (筑波大)、一色健司 (高知女子大)、
 板倉隆夫 (鹿児島大)、上村隆一 (北九州市立大)、
 小林昭三 (新潟大)、佐伯胖 (青山学院大)、
 武沢護 (早稲田大学高等学院)、森夏節 (酪農学園大)、
 矢部正之 (信州大)、湯浅良雄 (愛媛大)、
 若林靖永 (京都大)、今國喜栄 (監事、全国大学生協連)、
 高橋雅治 (事務局)、羽田咲子 (事務局)、
 石川保広 (オブザーバー、全国大学生協連)
 欠席：立田ルミ (獨協大)、松田憲 (立命館大)、
 山口久幸 (芝浦工業大生協)、
 和田寿昭 (全国大学生協連)

議 題

1. 各専門委員会、各研究部会からの報告 (委員長、責任者からの口頭報告)
 総会議案書より「2004 年度の事業報告と 2005 年度の事業計画」
2. 2005 年度収支見直しについて
3. CIEC プロジェクト事業の今後に向けて
 2005 年度 CIEC プロジェクト事業の概要
 板倉委員からの提案
4. 2006 年度学会表彰実施計画案について
5. 2006PC カンファレンスについて
6. その他
 2005PCC 論文集へのクレームに関する報告
 今後のスケジュール

1. 各専門委員会、各研究部会からの報告
 それぞれの責任者から報告があった。報告を受けての意見交換で確認された事柄は次の通り。
 (1)カンファレンス委員会 (報告者：綾)
 ・研究会講師への謝礼に関する基準づくりを改めて行なう。
 まず事務局が原案を作成し、これを運営委員会に提案する。
 現行は会員、非会員に対し 1 万円、3 万円の上限を設けているのみである。これを、教職員、学生などの階層の別、報告時間の長短など、いくつかの基準を設けて細分化する。
 (2)ネットワーク委員会 (報告者：板倉)
 ・鹿児島に置いている CIEC のサーバ(学会受付のシステム、PCC Web サイトとして稼働)を 12 月中に大学生協会館 (杉並) に移設する。
 (3)会誌編集委員会 (報告者：赤間)
 ・CIEC 創立 10 周年を記念する取り組みを、会誌独自の立場で、あるいは CIEC 全体との関係でどう行なうか、検討する。10 周年記念事業委員会とも協議を進める。
 (4)小中高部会 (報告者：武沢)
 ・06 年度の具体的な研究活動テーマは、10 周年記念事業とどう関連付けるかという視点で今後検討する。
 ・地域活動とのつながりを切り口に「北海道における情報教育の共通基盤形成に向けた研究プロジェクト」とのつながりも今後視野に入れる。
 ・教科「情報」への評価をめぐる中学、高校などへの調査の実施がひとつの課題となるが、運営委員会としても、調査のための基本的なフォーマット作成などで小中高部会を援助する。
 (5)外国語教育研究部会 (報告者：上村)

・次年度活動方針のひとつとして、携帯端末を活用した、PCに依存しない形での外国語教育に関する研究会、学習会の実施を計画する。

(6)報告全体を通じて

・全国大学生協連がCIECと共同で行なう「電子教材 Web サイト」構築の作業が現在遅延している旨、同連合会のCSグループより報告があった。合わせて、ソフトウェア商品の流通環境やライセンス問題の変化を見すえたうえで、同連合会として今後の方向性を再確立する計画であることも説明された。これらを受け、CIECとして、今までの経過も振り返りつつ、今年度中に今後の方針を再検討すること（再検討した方針の提案は一色委員から）、また、団体会員としての全国大学生協連と、この件についてよく協議することを確認した。

2. 2005 年度収支見通しについて

事務局が、11 月末までの決算状況をもとに、2005 年度（2006 年 3 月末日まで）収支見通しを報告した。個人会員の会費未納に関するいくつかの発言を通じ、今後の対応を次のように確認した。

- ・PC カンファレンスでの分科会発表申込時に、未納の場合はその旨知らせて納入を求める。
- ・2 年以上の未納者にも会誌を送り、その際に会費納入の催促状も同封する方式に改める。

3. CIEC プロジェクト事業の今後に向けて

板倉委員からの提案「『CIEC TypingClub 基金』の設立を提案します」を受けて、今年度以降の CIEC プロジェクト事業のあり方に関して協議した。

この時点での結論として、次の 2 つを確認した。

- ・06 年度の CIEC プロジェクト事業募集は延期する。
- ・06 年度予算計画作成の前に、このプロジェクト事業の存続について一定の結論を持つ。

今後の議論のためのポイントとして提出された意見は次の通り

- ・今までは（応募する）会員に対して、プロジェクトの成果物（金銭含む）を CIEC 本体に提供することを厳密には求めてこなかった。この事業をその方向に振るのか、それとも、成果は会員の共通の資産として活用する方向をとるのか、この大本をまず見極めねばならない。審査委員会はその大本に基づいて審査を行なうのが原則だ。この点で議論が必要だ。
- ・プロジェクト活動の成果をきちんと評価することが必要だ。
- ・TypingClub からの収入の予算。プロジェクト事業の予算。両者は分けて議論すべきだ。
- ・いわゆる一般財源に入れて予算化していた CIEC ウェア (TypingClub) からの収入が無くなる可能性があるわけだが、これは今までが正常な姿ではなかったと考えるべきだ。その確認から再出発する必要がある。
- ・所有と権利の関係をはっきりさせて、関連するもの同士で正式な文書を取り交わす用意をすべきだ。その文案は板倉委員と事務局が作成してはどうか。また、この CIEC Ware (TypingClub) をめぐる全国大学生協連と CIEC との関係の整理も必要だ。

4. 2006 年度学会表彰実施計画案について

学会賞の公募と選考を昨年と同様のスケジュールで行なうとしたうえで、以下の点を確認した。

- ・昨年は結局推薦が無かった。今回は、価値ある論文を見出し、その功績を積極的に評価し共有するという意味合いで、

CIEC 理事会、会誌編集委員会ともに、対象者の選考に向けて様々な努力をする。

- ・理事会のメンバーに対しては投票用紙を用意する。用紙には論文のリストを印刷し、また自由記入欄を設ける。公募と理事の協力でこの計画を実施する。

5. 2006PC カンファレンスについて

若林副会長からの第 1 回実行委員会（12 月 3 日）報告を承認した後、次の 2 点を確認した。

- ・分科会レポート募集要項はまず e-mail での案内として、これまでの PCC 参加者・CIEC 会員を対象に、12 月下旬に発信する。
- ・PC カンファレンスの全体テーマ「自由な学びかトレーニングか」を、可能な限り早く Web サイトなどの宣伝媒体や後援依頼書に明記したいという事務局からの提案を受け、この件に関して、2006PCC 実行委員会のメーリングリストで早急に検討する。

6. その他

「2005PCC 論文集へのクレームに関する報告」の内容とこの問題の現況を全体で確認した。

以上